

俳句における極限構造としての汎化

新 田 義 彦

1 はじめに

1.1 研究の目標

俳句を典型例とする日本語断片文の構造を、汎化（一般化）する試みについて述べる。そしてこの汎化が、日本語断片文の、ある意味での極限構造であることを論じる。構造は意味と統語の両面から捉え、一般化や抽象化により普遍的な意味、美的に語られるメッセージの極限に迫る努力をしてみたい。本論文は、いまだ試行（思考）段階にある新研究の初期成果の速報のような内容である。

つぎに「極限」を追究する理由について述べる。やや飛躍があるが、純粋数学において、一般性と抽象性が高い理論の1つに、カテゴリ論（Categorical Theory）というものがある。（cf. Saunders Mac Lane, *Categories for the Working Mathematician* (2nd ed.), 1998 Springer-Verlag New York）

カテゴリ論が提示する極限（limit, 射影的極限とも呼ばれる）あるいは余極限（colimit, 帰納的極限とも呼ばれる）の概念は、構造をもつ対象の普遍的な性質を論じる際に威力を発揮する。異分野の構造体の間の類似性・関連性・同型性を透明な形で照らし出すからである。代数学、幾何学、解析学など数学の全分野における有効性が実証済みであるが、オートマトン論やパーキング論などの数理言語学分野、そしてソフトウェア技術、言語による種々の仕様記述、データ管理、など構造をもつ文章情報処理全般に有効なことが指摘され利用する機運が高まりつつある [Esterbrook 1999] [Goguen 1988].

本研究論文では、文芸（文形式の芸術的作品）という観点から、やや恣意的に語られ評価されることが多かった、「俳句」という「断片的美文」の持つ普遍的な構造をカテゴリ論の手法によりあぶりだす試みの初期成果を報告する。

1.2 カテゴリ論が定義する極限

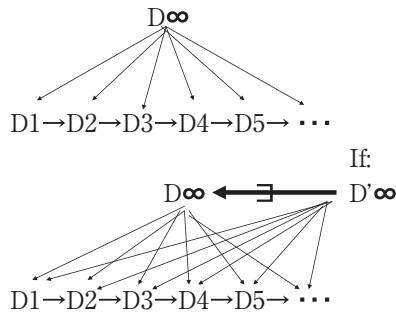
類似の構造を持つ対象の系列（ダイアグラム）を、

$$\cdot D1 \rightarrow D2 \rightarrow D3 \rightarrow D4 \rightarrow D5 \rightarrow \dots$$

とする。このダイアグラム $\{D_i\}$ の極限（limit）は、日常的感觉では、 D_i の行き着くとどのつまり D_∞ のようなイメージで捉えられることが多い。カテゴリ論では、この極限をいま少し厳密性と透明性の高いやり方で定義する。厳密・透明は、普遍的・汎用的と言い換えることができる。

この極限は D_i ($i = 1, 2, 3, 4, 5, \dots$) 達すべての属性を包含（兼備）する。

仮にもうひとつ別の極限候補 D_∞' が存在したとしても、実質的に $D_\infty' = D_\infty$ となる。つまり極限は本質的に唯一性（ユニークネス）を持つ。その意味で極限は普遍的な概念である。



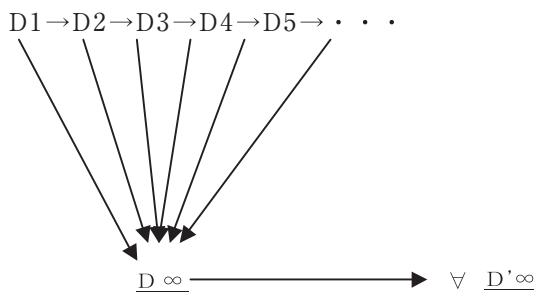
もう少し数学的に述べると下記ようになる。

対象 D_i と射 (morphism) a_i を持つダイアグラム $\{D_i, a_i\}$ の極限 (limit) とは, $\{D_\infty, li: D_\infty \rightarrow D_i\}$ のことである. 但し, li は対象 D_∞ から対象 D_i に向かう射である. また, ほかに極限の候補 D'_∞ が存在しても, 必ず D'_∞ から D_∞ に向かう射があり, $D'_\infty \rightarrow D_\infty \rightarrow D_i$ と $D'_\infty \rightarrow D_i$ は可換 (commute) となる. 極限は, 極限候補となる対象達の中で終点対象 (terminal object) となっている.

上記の定義において, 射 (矢印 \rightarrow) の向きをすべて逆向きにすると, 余極限 (colimit, 射影的極限) の定義が得られる. 余極限は, 余極限候補となる対象達の中で始点対象 (initial object) となっている.

再論する. 極限は, 極限候補達の終点対象 (terminal object) である. 極限 D_∞ から系列の任意の対象 D_k (ただし $\forall k$) に行くことができる. つまり D_∞ から D_k に向かう射が必ず存在する. その意味で全ての対象の行き着く先ともみなせる. 極限 (limit) は, 射影的極限とも言われる.

「極限」の双対概念として余極限 (colimit) \underline{D}_∞ を考えることができる. 余極限は帰納的極限と呼ばれることもある. すべての余極限候補達の最初に立つ対象, 始対象でもある. つまり余極限 \underline{D}_∞ からは, 系列 $\{D_i\}$ 達の任意の対象 D_k (ただし $\forall k$) に行くことができる.



1.2 米田信夫の End (終端)

D_i とその双対 D^*i を組み合わせて, (D^*i, D_j) この系列の極限を考えると, それは米田の End (終端) となる. 矢印の向きを逆にして双対を考えると, Coend (余終焉) の概念が得られる.

D_i と (D^*i, D_j) の関係は, ベクトル空間とテンソル空間がその一例である.

このような極限，余極限，あるいは終焉，余終焉は，数学や科学の範囲を飛び出して，自然界，精神界，哲学界，思想界，美学界に，顕著な具体例を持つであろう。（この議論は今回は省略する）

相当乱暴な動機であるが，Category 論に刺激されて：

- ・俳句 Hi の系列（= 集合に適当にインデクスを付与したもの）の極限あるいは余極限なるものは，一体どのような姿形をしているのか？ 探りたくなった。
- ・インデクス付け（俳句の系列化）が，恣意的でよいことは，極限の持つ普遍性（唯一性）により保証される。
- ・俳句 Hi の双対俳句 H^*I なるものをうまく定義できれば，End（終端）あるいは Coend（余終焉）を考察できるが，これは後回しにする。

2 俳句の統語構造の般化

- ・素朴に N, V, F という統語カテゴリの並びを観察してみる。

ただし N = 名詞（あるいは体言相当語）

V = 動詞（あるいは用言相当語）

F = 機能語（あるいは切れ字，助詞相当）

- ・GPSG や HPSG における，素性の共起に関する制約，下位範疇化原理，主辞素性原理，線形順序規約，などの束縛条件による統語構造の規定は，俳句のごとき断片的日本語文の統語解析には，過剰装備かもしれない。
- ・これらの現代文法論では，文を構成する制約情報が，すべて，下位の構成語彙から上位の句構造に上昇伝播すると考えるが・・・

2.1 素朴統語パターンの例

1) 秋立つや身はならはしのよその窓 一茶

（立秋を旅先で迎え，他人の家の窓から秋を見ているのだがそれにはもう慣れた）

N V や N は N の N の N

但し や, は, の ∈ F

註：俳句の例の大部分は，“大野林火 監修，俳句文学館 編，ハンディ版 入門歳時記 第3版，角川書店（1988）”の秋の部より取った。

2) 桐一葉日当たりながら落ちにけり 高浜虚子

（素朴明快な句，秋の季語の様態を素直に描写 cf. 一葉落ちて天下の秋を知る 淮南子 世の衰亡の兆しを感知する）

N N V しながら V にけり

但し ～しながら, にけり (～した) ∈ F

3) 砂山をのぼりくだりや星月夜 (ほしづくよ) 日野草城

(簡単明瞭. 秋の夜, 砂山を登り下りして眺める天の星月は格別の味わいがある.)

N を V V や N

但し を, や ∈ F

4) 米提 (さ) げてもどる独りの天の川 竹下しづの女

(夫に死別し苦労しながら子育てしている生活の句 (cf. 大野林火). 生活が苦しいゆえに天の川の美しさが引き立つ)

N V して V N の N

竹下しづの女 (たけした しづのじょ) の略歴を主に Wikipedia を引用して述べる.

1887年3月19日-1951年8月3日)は,日本の俳人.本名は静廼(シズノ).福岡県京都郡稗田村(現行橋市)出身.福岡女子師範学校(後の福岡教育大学)卒業後,6年間の教員生活を経て結婚.2男3女を儲ける.育児の傍ら本格的に句作を始め,吉岡禅寺洞・高浜虚子に師事.虚子が主催する「ホトトギス」の巻頭を飾るなど,中央の俳壇でも認められるようになり,杉田久女・長谷川かな女らとともに女流黄金時代をつくった.1928年「ホトトギス」同人.理知的な手法で,女性の自我や自立を詠った作品が多い.1937年には学生俳句連盟の結成にあたり機関誌「成層圏」を創刊,その後参加した中村草田男とともに指導にあたり,香西照雄,金子兜太ら後進を育てた.また没年まで九大俳句会を指導している.

代表句, 短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉 (すてつちまおか)

その他, 凍て飯にぬる茶もあらず子等昼餼

夏帽や太眉秘めて一文字

夏瘦の肩に喰ひ込む負児紐

夜寒児や月になきつつ長尿 (ゆば) り

(Wikipedia の引用おわり)

5) 米買ひに雪の袋や投頭巾

松尾芭蕉

「貧」を主題とした句会において,芭蕉には米買いの役が当たった.おりしも雪が降り始めたので,投頭巾をかぶって行こうか.投頭巾には買った米を入れるつもり.「雪」と「行き(ゆき)」を掛けて洒落を言っている.芭蕉の友人の深川の八貧とは,依水(いすい),苔水(たいすい),泥芹(でいきん),路通(ろつう),曾良(そら),友五(ゆうご),夕菊(ゆうぎく),そして芭蕉である.「米」が生活必需品として極めて高い価値を持っていた当時のことを想起すべきである.貧乏の中の明るい生活感覚がさり気なく読まれているように思う.前句4)の必死の生活感がにじみ出る「貧」とは違うモードに注意すべきかと思う.

N V しに N の N や N

- 6) 山川（やまがわ）に流れてはやき盆供（ぼんく）かな 飯田蛇笏
 （山間の急流で行う精霊流し。孟蘭盆（裏盆 7月20日の儀式。あまりにも早く流れてしまい祖先を思いやるゆとりもない）

N に V して A N かな

- 7) 踊り子となりて二夜（ふたよ）の手振りかな 北村昭子
 （お盆に里帰り。二晩も踊ると流石に娘時代の踊りの勘が戻ってきた）

N V して N の N かな

- 8) 西開くままに流燈西へ行（ゆ）く 山口誓子
 （西側が開いている河口。その流れに乗って流燈（=精霊（しょうりょう））は西方浄土の方角に向かって行く）

N V するままに N N へ V

- 9) 敗戦日空が容れざるものあらず 石田破郷

（敗戦の日、空は青く大きくすべてを包容するようだ。自由が来た。）

N (Adv) N が V しない N notV

- 10) 降り足らぬ残暑の雨や屋根の塵 永井荷風
 残暑の頃の中途半端な降雨。屋根には塵が流されず残っている。蒸し暑いなあ）

V notV N の N や N の N

2.2 俳句文の統語レベルの極限

・ H^∞ は 顕著な有意性は持たないようだ。

$H^\infty = \text{Scrambling of } \{N, V, A, F\}$

ただし $\text{Scrambling of } \{\cdot \cdot \cdot\}$ は実は $\text{Very Carefully Arranging of } \{\cdot \cdot \cdot\}$ である。

特に F の選択と配置が精妙で難しい。

俳句の統語レベルでの極限には、統語記号の精密化などの課題が残されている。今回は動詞（V）と名詞（N）の区別、特別な機能語 F（の や かな する して しながら にけり 等）を弁別しただけだったが、このメタ記号にさらなる工夫が必要であることがわかった。

3 俳句の意味構造の汎化

(1) 語のレベルの意味は取り上げない。

つまり N + V や V + N の意味は考慮するが、N 単体 V 単体での意味は考慮しない。

(2) 単純命題文を核文（Kernel Sentence）と呼び、核文 K1 と核文 K2 の間の関係を、メタ文 M（=

俳句文を形成する超文)として取り上げる.

(核文とメタ文については、前報でも報告した)

(3) 今回は M_i (K_{i1}, K_{i2}) ($i=1, 2, 3, \dots$) の極限 M_∞ ($K_{\infty 1}, K_{\infty 2}$) について考察する.

11) 新涼や豆腐驚く唐辛 前田普羅

(新涼 = 秋涼 = 秋涼し)

(白い豆腐に赤い唐辛子がぱっと散って驚かされる. 秋の涼しさの中で食する豆腐は格別だ)

K_1 = 時は新涼である

K_2 = 豆腐が唐辛子に驚く

$M = K_1$ が原因 (理由) で K_2 , K_1 のとき K_2

12) いなびかり北よりすれば北を見る 橋本多佳子

(北の空に稲妻が光ったので、北の方向を見た. 北の地では秋は深くもう寒いぐらいだろうか)

K_1 = 北から稲光がくる

K_2 = 北を見る

$M = K_1$ が原因 (理由) で K_2 , K_1 のとき K_2

13) 鼻さきに伊賀の濃闇 (こやみ) よ流れ星 大野林火

(鼻を摘まれても分からぬほどの 伊賀の国の闇夜. そこに突如流星が落ちる. これは吉兆かはたま凶兆か)

K_1 = 伊賀の国 (= 三重県西部. 伊州と賀州) の濃い闇夜

K_2 = 流星が降る

$M = K_1$ という時場に K_2 が起きる

14) 残月やひらかむ芙蓉十 (とお) あまり 水原秋桜子

(意味は明瞭. 残月と花開かぬ芙蓉の対比が独特の感懐を呼ぶ.)

K_1 = 有明の月

K_2 = 花開かぬ芙蓉が十余ある

$M = K_1$ が K_2 を強調 (印象深く) する

(開かぬ芙蓉を自身の境遇の何に準えるかは、勝手)

15) 白粉花 (おしろい) や多忙の窓辺土荒れぬ 中村草田男

(白粉花 (おしろいばな) が咲いている窓辺. 秋のこの頃は多忙で庭の手入れもできず土が荒れていることよ)

K_1 = 白粉花が咲いている

K_2 = 私は多忙である

K_3 = 庭土が荒れている

$M = K_1$ の頃, K_2 が原因で K_3

16) 朝顔の終（つい）の一花（いっか）は誰（た）も知らず 福田蓼汀（りょうてい）

（朝顔は生命力が強く秋に入って涼気が強まっても咲き続ける。最後の一花がいつしおれてしまったのか、誰も気がつかないほどだ）

K1 = 朝顔の最後の一花がしおれてしまった

K2 = 誰も知らない

M = K1 について K2 である

福田蓼汀（りょうてい）の略歴を示す。下記は Wikipedia からの引用である。

- ・ 略歴
- ・ 山口県萩町（現在の萩市）生まれ。父は陸軍中将の福田彦助。
- ・ 東北大学在学中に学友の勧めで高浜虚子門に入った。また、山口青邨の「夏草」にも所属し、1940年には「ホトトギス」同人、虚子が指導する「九羊会」の一員となった。この時に川端茅舎、松本たかし、中村草田男らと交流を深める。
- ・ 1948年には自ら「山火」を創刊してその主宰となるほか、橋本鶏二の「年輪」、野見山朱鳥の「菜殻火」、波多野爽波の「青」と共同で四誌連合会を結成し、その世話役を務めた。また、1939年の八ヶ岳登山を皮切りに、日本各地の山々を踏破し、山岳俳人の第一人者として名を高めた。
- ・ 1970年に「秋風挽歌」が第四回蛇笏賞を受賞するが、これは奥黒部での二男の遭難死を悼んで詠んだものである。
- ・ 1988年1月18日、没。享年82。
- ・ 作風
- ・ 山岳俳句の第一人者として名高い。岡田日郎は蓼汀を「山岳と自然の純粹美を讃える作品」と単刀直入に評価した。また、蓼汀本人も季節感情と対象を具体的に把握しようとする写実精神を主張し、当時隆盛を極めた「社会性俳句」とは一線を画すというスタイルを貫いた。
- ・ (引用おわり)

17) 朝顔の紺の彼方の月日かな 石田波郷

（朝顔の紺色を見つめていると、その先に未来の月日が広がっているようだ。「の」の連鎖を巧みに使用して時間と空間の広がり演出）

K1 = 朝顔の紺色

K2 = 彼方に時間が広がっている

M = K1 が原因（契機）となって K2

18) いつ死ぬる金魚と知らず美しき 高浜虚子

（儚い命の金魚であるが、その故に美しい）

K1 = 金魚がいつ死ぬかは分からない

K2 = 金魚は美しい

M = K1 が原因（理由）で K2

註：これは夏の句

19) 風鈴や花にはつらき風ながら 与謝蕪村

(風鈴が秋風に心地よく鳴っている。花にとっては風はありがたいだろうが)

K1 = 風が風鈴を鳴らす

K2 = 花は風を嫌う

M = K1 しかし (相反するが) K2

20) 頬杖に深き秋思の観世音 高橋淡路女

(ものあわれは秋こそまされ と言いますが、如意輪観世音菩薩さまが頬に手をお当てなさっている姿は、秋のもの思いそのものですねえ)

K1 = 観世音菩薩が頬杖をついている

K2 = 観世音菩薩がもの思いに耽っている

M = K1 は K2 そのものである

K1 = K2 である

21) 芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏

(芋畑の葉に露が清澄に乗っているのを見ると、遠くの山々もまたその居ずまいを正しているように感じられる。これから厳しい冬が来るのだなあ)

K1 = 芋の葉の上に露が乗っている

K2 = 遠くの山々が居ずまいを正す

M = K1 が原因で K2 (を感じる)

4 意味構造の極限

$H^\infty = M^\infty (K1, K2)$

$M^\infty =$ 原因・理由・時・場所・状況

K1 と K2 がどのようなものであっても、 M^∞ から深く静かな感動・感懐・納得・了解が導かれる

M^∞ は、高次元の精神性・簡潔性・完了性などの知性を随伴する。

現代俳句においては必ずしも高次元の精神性を追求せずに新しい生活感覚や人生の悦び・感動を直裁に詠うものが少なくないようだ。

極限あるいは余極限の位置を占めるような代表的古典句を抽出し、これらの古典句(極限句)から多くの秀句が導出される様子、あるいは多くの秀句が代表的古典句(余極限句)に収斂する様子を示すことを、意図して本章を設けたが、[余]極限の名に相応しい代表句であるか否かの判定が、現段階では心もとない状況にある。[余]極限句の提示は後報に回すことにした。

日々制作される現代俳句のごく一部を、新聞[Asahi 2013]および文化情報誌[Hon 2011]より抜粋して下記に列挙し、それらの極限を再度検討してみる。

22) いつの間に築二十年隙間張る

上村敏夫

- M (K1, K2) = K1 を不思議に思いながら K2 する K1 と K2 の相反
 K1 = いつの間に築二十年
 K2 = 隙間張る
- 23) 木枯らしやひたと揺るがぬ白鳥座 酒井湧水
 M (K1, K2) = K1 が存在するのに K2 K1 と K2 の相反, 対比, 対極
 K1 = 木枯らしが吹く
 K2 = 白鳥座はひたと揺るがぬ
- 24) 母逝きことししみみ冬に入る 中西あい
 M (K1, K2) = K1 をしみじみ思う それに随伴するように K2 K1 と K2 が釣り合う
 K1 = 母逝きことをしみじみ思う
 K2 = 冬に入る
- 25) 地に還る落葉にもある吐息かな 柴田香織
 M (K1, K2) = 我々人間にある K2 が K1 にもある K1 が K2 に同調・共感
 K1 = 地に還る落葉に吐息がある
 K2 = 人間には吐息（嘆き・諦め）がある
- 26) 大寺は御僧一人冬に入る 井斧眞一郎
 M (K1, K2) = K1 は K2 とよく釣り合う
 K1 = 大寺は御僧一人
 K2 = 冬に入る
- 27) 雪晴れの空に深さの生まれけり 高橋とも子
 M (K1, K2) = K1 は K2 とよく釣り合う
 K1 = 雪晴れの空
 K2 = 深さが生まれる
- 28) 眠れる日眠れぬ日ありラフランス 時田幻楯
 c
- 29) ねんごろに霧立つところ陰の神 本多豊明
 M (K1, K2) = K1 と K2 とがよく釣り合う, K1 が K2 を誘起（連想）する
 K1 = ねんごろに霧立つ
 K2 = 陰の神が佇んでいる
- 30) 冬の霧巻くかはたれに詩と出会う 浅賀信一郎
 31) 醜態を我ら隠せし海鼠美し 馬淵兼一

M (K1, K2) = K1が人間界の実態なのに K2 K1とK2の相反, 対比, 対極
 K1 = 人間(我ら)は醜態を我ら隠す
 K2 = 海鼠はありのままを曝け出す(がゆえに美しい)

32) 余寒さの一語半語や港の灯	杉本秀明
33) 月山の優しいうちに冬支度	三浦大三
34) 弁当を使ふ孤独に秋惜しむ	芳村翡翠
35) 冬に入る煮つけと煮物は違うとか	山口秋野
36) 大根の炊くほど水に近づけり	野上 卓
37) 降る雪や日本と言ふ闇深き	阿部恭久
38) 一切を削ぎ落としたる寒林へ	勝村 博
39) 初氷待つ大根の白さかな	中村いつき
40) 白を着て仏師集団冬に入る	田島もり
41) 隙間風なき世の息苦しさよ	渡邊 隆
42) 干柿のやうな齢となりにけり	今村征一
43) 折鶴の折目正しく冬に入る	小山内豊彦
44) すんなりと言へぬことあり豆の飯	真理子
45) 豆飯や聞こゆる筈もなき汽笛	いずみ
46) 捨て切れぬ父の箸箱豆の飯	洋酔
47) 豆ご飯指三本の塩加減	淳子
48) あぢさみを剪りてゆふべの雨こぼす	伊藤伊那男
49) 父の日と言はれてさういへばと思ふ	伊藤伊那男
50) 夕月の色に信濃の杏干す	伊藤伊那男

一部分の意味解析しか提示できなかったが、M (K1, K2) が K1 と K2 の同期・共鳴・共感・随伴となる句には、その極限に位置する代表句が存在すると予想して、古典句群から代表句を探索する意義があるように思われる。

同様に M (K1, K2) が K1 と K2 の相反・対比・対照・矛盾となる句にも、極限に位置する代表句が存在すると予想される。次の論文で取り上げたい。

5 結語にかえて

- 1) 俳句を典型する日本語断片文の、統語構造の極限(般化の帰結)は、あまり有意味ではなかった。体言(N)や用言(V)の連鎖に機能語・切れ字(F)が、塗されたパターンしか得られぬから。
- 2) GPSGやHPSGにおける、下位範疇化の概念を適用しても、有意な極限は得られぬように思われる。
- 3) 日本語断片文の、意味構造の極限(般化の帰結)は、概ね M (K1, K2)
 M = 時, 場所, 理由, 原因

という構造をしている。核文 Ki の大まかな意味を形式化して、M との関係を同定できれば、意味構造の極限の意義はさらに強化されると思われる。今後の課題としたい。

- 4) Ki の意味を記述する粒度は慎重にやるべきである。細かすぎると極限が存在しなくなる。
- 5) 俳句全体を一派からげて扱うのではなく、
叙景、感謝、辞世、諦観、祝賀、孝養、惜別、など大分類してから扱うと、意味的極限がさらに
具体化するかもしれない。
- 6) 季語、季節による大分類は、意味的極限の具体化には貢献しない。
- 7) 現代俳句は今回扱わなかった。好嫌、未練、恋情、憧憬、悲嘆、歓喜、憤怒、欲望、などの感情、
かって俳句の対象としてタブー視されていた題材を無制限に取り込み、かつ俗語や若者言葉、擬
声語、擬態語を大胆に利用するので、極限の形態・様相も、大きく異同すると予想される。現代
俳句の取り扱いは今後の課題としたい。

参考文献

- [Asahi 2013] 朝日俳壇, 2013-12-2 付け 朝日新聞朝刊 11P (1013)
- [Eilenberg 1945] Eilenberg, S., Mac Lane, S. General Theory of Natural Equivalences, Trans. Am. Math. Soc. No. 58 (1945) pp.231-294
- [Esterbrook 1999] Esterbrook, Steve, An Introduction to Categorical Theory for Software Engineers, Dept. of Computer Science, Univ. of Toronto, <http://www.cs.toronto.edu/~sme/presentations/cat101.pdf> (1999)
- [Freyd 1964] Freyd, P., Abelian Categories: An Introduction to the Theory of Functors, New York (1964) Harper and Row
- [Gengo 2012-4] 特集「文法の誕生、文法の探求」, 月刊 言語, 大修館書店, Vol.31, No.4 (2012-4)
- [Goguen 1988] Goguen, Joseph A., A Categorical Manifesto, Technical Monograph PRG-72, Oxford University Computing Laboratory, Programming Research Group (March 1989)
- [Gunji 1997] 郡司隆男, 自然言語の文法理論, 産業図書 (1997 - 12 - 15)
- [Hashimoto 1934] 橋本進吉, 国語法要説 (橋本進吉 著作集, 第2冊) 岩波書店 (1934)
- [Hashimoto 1944] 橋本進吉, 文と文節と連文節 橋本進吉 著作集, 第7冊) 岩波書店 (1944)
- [Hon 2011] 本の街 No.369, 月刊文化情報誌, 本の街編集室, 神田御茶ノ水九段 (2011-7)
- [Inada1989] 稲田俊明, 補文の構造, 大修館書店 (1989-2-15)
- [Inahata 2010-6-1] 稲畑汀子 [編], 第三版 ホトトギス新歳時記, 三省堂 (2010-6-1)
- [Inoue-K 1976] 井上和子, 変形文法と日本語 上, 大修館書店, 東京 (1876)
- [Inoue-T 2002] 井上 徹, 英語における補文省略現象, 日本語用論学会 第5回大会 於 関西外国語大学 (2002-12-7) 初出「Missing Complement に関する一考察」
- [Kadokawa 2012-12] 角川俳句——「省略」の極意, 角川学芸出版 (2012-12)
- [Kadokawa 2013-1] 角川俳句——新年の季語, 角川学芸出版 (2013-1)
- [Kadokawa 2013-2] 角川俳句——俳句は「瞬間」を詠む, 角川学芸出版 (2013-2)
- [Kadokawa 2013-3] 角川俳句——春の名句 100 選, 角川学芸出版 (2013-3)
- [Kadokawa 2013-4] 角川俳句——俳人 100 名言, 角川学芸出版 (2013-5)
- [Kadokawa 2013-5] 角川俳句——新・俳句入門, 角川学芸出版 (2013-2)
- [Kasai 2008] 葛西清蔵, there 構文と俳句, 札幌大学総合論叢, 第25号 (2008-3) pp.133-139
- [Kobayashi 2012-3] 小林可奈子, 俳句学習の可能性, 大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究, No.10, (2012-03-31) pp.23-37
- [Kokubungaku 2010-7] ぎょうせい国文学 - 解釈と鑑賞, 第73巻7号 (2010-7)
- [Kurasaka 2012] 倉坂鬼一郎, 怖い俳句, 幻冬舎新書 260, 幻冬舎 (2012)
- [Kuwabara & Mastuyama 2001] 桑原和生, 松山哲也, 補文構造, 哲学モノグラフシリーズ 4, 研究社 (2001-5-15)
- [Lee 1995] Lee 凧子, 日本語の補文構造——Lexicase 文法理論による分析, くろしお出版, 東京 (1995)
- [Mac Lane 1998] Saunders Mac Lane, Categories for the Working Mathematician (2nd ed.), Springer-Verlag New

- York (1998)
 (訳本: S. マクレーン 著, 三好博之, 高木 理 訳, 圏論の基礎, 丸善出版 (2012-3))
- [Matsushita 1977] 松下厚, 日本語文法の体系, 明治書院 (1077)
- [Mizuhara 2005-1-17] 水原秋櫻子 (編), 新装版 俳句小歳時記, 大泉書店 (2005-1-17)
- [Mogi 2000-10] 茂木俊伸 (としのぶ), とりたて詞の階層性について, 国語学会秋季大会於 安田女子大学 要旨集 (2000-10-28 ~ 29) pp.54-61
- [Nitta 2006] Y. Nitta, Building Carefully Tagged Bi-lingual Corpora to Cope with Linguistic Idiosyncrasy, Proc. LREC' 06, 5th International Conference on Language Resources and Environment, Genova, Italy (2006) pp.840-854
- [Nitta 2007-10] 文意の論理表現 (Representing Sentential Semantics in Logic), 経済集志, Vol.77, No.3 日本大学経済学部 (2007-10) pp.21-52
- [Nitta 2008] Y. Nitta, Applying Machine Translation Technology to Language e-Learning, Proc.11th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE2008) Greek, Crete Island (2008) pp.201-207
- [Nitta 2008-3] 新田義彦, 言語産業を支える基礎技術の展望 (A View of Basic Technologies for Language Industry), 産業経営研究 第 30 号 (2008-3) pp.57-69
- [Nitta 2011-1] 新田義彦, 不完全な機械翻訳の利用法と課題 (The Utility and Problem of Insufficient Machine Translation), 経済集志, Vol.80, No.4 日本大学経済学部 (2011-1) pp.1-54
- [Nitta 2011] サイバースペースにおける自我と新産業 (On Self-consciousness and New Business in Cyber-space), 産業経営研究 No.33 (2011)
- [Nitta 2011-10] 新田義彦, 函数型文法による詩文の解釈 (An Interpretation of Poetic Sentences by Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.3 日本大学経済学部 (2011-10) pp.1-13
- [Nitta 2011-4] 新田義彦, 対訳アラインメントの効用の検討 (A Study on the Utility of Bilingual Alignment), 経済集志, Vol.81, No.1, 日本大学経済学部 (2011-4) pp.1-38
- [Nitta 2012-3-20] 新田義彦, 俳句の意味の形式的解釈の試み (An Essay on a Formal Interpretation of HAIKU), A-13-5 思考と言語セッション, 電子情報通信学会 2012 総合大会 (岡山大学) 講演論文集 (2012-3-20)
- [Nitta 2012-3-31] 新田義彦, 機械翻訳の原理と活用法——古典的機械翻訳再評価の試み, 明石書店 (2012-3-31)
- [Nitta 2012-7] Y. Nitta, Fragmental Syntax of Haiku and Its Effect in Elementary Language Education, 経済集志, Vol.82, No.2 日本大学経済学部 (2012-7) pp.21-32
- [Nitta 2012-10] Y. Nitta, Aesthetic Sentence Generation by Functional Grammar, 経済集志, Vol.82, No.3 日本大学経済学部 (2012-10) pp.9-17
- [Nitta 2012-3] 新田義彦, 日本型言語産業としての詩文作成支援システムの検討 (A Study on a Poetic Sentence Composition Support System as a Typical Product of Japanese Language Industry), 産業経営研究, 第 34 号, 日本大学経済学部 (2012-3) pp.1-19
- [Nitta 2012-1] 新田義彦, 函数型文法による単文の変形 (Transformation of Simple Sentence using a Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.4, 日本大学経済学部 (2012-1) pp.1-29
- [Nitta 2012-3-1a] Y. Nitta, Foreign Language Education Using Classical Transfer-Base Machine Translation Technique, Recent Advances in Computer Science and Information Engineering Vol. 3, Springer Verlag (2012-3-1) pp.443-450
- [Nitta 2012-3-1b] Y. Nitta, Functional Treatment of Bilingual Alignment and Its Application to Semantic Processing, Advances in Intelligent and Soft Computing 144, Proceedings of the 2011 2nd International Congress on Computer Applications and Computational Science, 2011 Bali, Indonesia (2011-11-16), Springer Verlag (2012-3-1) pp.223-229
- [Nitta 2012-5a] Y. Nitta, Formal Interpretation of HAIKU and Its Application to Communication Interface, Proceedings of ICSI 2012 (International Conference on Systems and Informatics), Yantai University, China, and IEEE (2012-5-19)
- [Nitta 2012-5b] Y. Nitta, Functional Treatment of HAIKU and Its Application to Language Education, Proceedings of the 8th International Conference on Fuzzy Systems and Knowledge Discovery (FSKD 2012) Chongqing, China (2012-5-29)
- [Nitta 2012-7] Y. Nitta, Fragmental Syntax of HAIKU and Its Effect in Elementary Language Education, 経済集志, Vol.82, No.2, 日本大学経済学部 (2012-7) pp.21-32
- [Nitta 2012-8a] Y. Nitta, Aesthetic Sentence Generation by Functional Grammar, 経済集志, Vol.82, No.3, 日本大学経済学部 (2012-8) pp.9-17
- [Nitta 2012-8b] Y. Nitta, An Approach to Linguistic Aesthetics by Functional Grammar, Proceedings of 22nd Biennial Congress of The International Association of Empirical AESTHETICS, Taipei (IAEA2012), (2012-8-22 ~ 25)

- [Nitta 2013-4] Y. Nitta, 俳句における補文構造とその省略の種々相 (Complement Structure in HAIKU and Its Variety of Ellipsis Types), 経済集志, Vol.83, No.1, 日本大学経済学部 (2013-4) pp.13-26
- [Nitta 2013-7] Y. Nitta, 日本語断片文の統語構造 (Syntactic Structure of Fragmental Japanese Sentences), 経済集志, Vol.83, No.2, 日本大学経済学部 (2013-7) pp.23-43
- [Nitta 2013-8] 新田義彦, 俳句の構造の汎化の試み LACE 辞書 Project 第2期第3回会議, 講演スライド, 於 名古屋国際会議場センター, (2013 - 8 - 24)
- [Okutsu 1974] 奥津敬一郎, 生成日本文法論, 大修館書店 (1974)
- [Oono 1984-4-20] 大野林火 [監修], 俳句文学館 [編] ハンディ版入門歳時記, 角川書店 (1984-4-20)
- [Pollard and Sag 1987] Information-Based Syntax and Semantics, Volume 1 Fundamentals, CSLI Stanford University (1987) 翻訳: カール・ポラード and アイバン・A・サグ (原著), 郡司隆男 (訳), HPSG 入門——制約にもとづく統語論と意味論, 産業図書 (1994 - 5)
- [Saraki & Nitta 2007] 佐良木 昌・新田義彦, シテ形用言連接句の対訳データ構築と日英機械翻訳の訳質改善, 言語処理学会論文集, NL2007, C1-3 (2007)
- [Saraki & Nitta 2008] 佐良木 昌 & 新田義彦, 正規表現とテキスト・マイニング (増補2刷), 明石書店 (2008-4)
- [Sells 1985] Peter Sells, Lectures on Contemporary Syntactic Theories: An Introduction to Government Binding Theory, Generalized Phrase Structure Grammar, and Lexical Functional Grammar CSLI (Center for the Study of Language and Information) Stanford University, 翻訳: ピーター・セルズ (原著), 郡司隆男, 田窪行則, 石川彰 (訳), 現代の文法理論——GB理論, GPSG, LFG 入門, 産業図書 (1988 - 4)
- [Satake 1986] 佐竹昭広, 古語雑談, 岩波新書 350, 岩波書店 (1986)
- [Shimizu 2013] 清水義夫, 記号論理学講義, 東京大学出版会 (2013)
- [Shouji 1997-3] 庄司育子, 日本語の補文構造に関する一考察: 「Vに行く」構文について, 日本語・日本文化, 23 pp.39-53, OUKA (Osaka University Knowledge Archive) <http://hdl.handle.net/11094/9762> 大阪大学 (1997)
- [Takabane * * * *] 高羽四郎, 芭蕉俳句の構文と表意——客語の主体化について, 国文学研究1 (* * * *)
- [Takai 2008-1] 高井収, 異文化コミュニケーション教育の試み——高コンテキスト文化としての俳句, Language Studies, 小樽商科大学言語センター広報, 学術成果コレクション Barrel <http://hdl.handle.net/10252/203> 小樽商科大学 (2008) No.16 pp.57-62
- [Tokunaga 2010-7] 徳永哲矢, 文の分析と主語——「主語」を問う視点, 国文学-解釈と鑑賞, 第73巻7号 (2010-7) pp.40-49
- [Yoneda 1954] Yoneda, Nobuo, On the Homology Theory of Modules, J. Fac. Sci. Tokyo, Sec. I .7 (1954) pp.193-227
- [Yoneda 1960] Yoneda, Nobuo, On Ext and Exact Sequences, J. Fac. Sci. Tokyo, Sec. I .8 (1960) pp.507-526

以上